

# 養老

世阿弥作

季は	地は	シテ	後	ツレ	シテ	ワキ	前
夏	美濃	山神		翁の子	樵の翁	勅使	

「風も静に楓の葉の。／＼。鳴らさぬ枝ぞのどけき。

詞

「抑是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても濃州本巣の郡に。不思議なる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。唯今濃州本巣の郡へと急ぎ候。

道行

「治まるや。國富み民も豊かにて。／＼。四方に道ある関の戸の。秋津島根や天ざかる。鄙の境に名を聞きし。美濃の中道ほどなく。養老の滝に着きにけり。／＼。

シテ、ツレ一聲  
「年を経し。美濃の御山の松陰に。猶澄む水の緑かな。

ツレ  
「通ひなれたる老の坂。

二人  
「行く事安き心かな。

シテサシ  
「故人眠り早く覚めて。夢は六十の花に過ぎ。

二人  
「心は茅店の月に嘯き。身は板橋の霜に漂ひ。白頭の雪は積れども。老を養ふ滝川の。水や心を清む

らん。

下歌  
「奥山の。深谷の下のためしかや。流れを汲むとよ  
も絶えじ。く。

上歌  
「長生の家にこそ。く。老せぬ門はあるなるに。  
是も年ふる山住の。千世のためしを松陰の。岩井  
の水は薬にて。老を延べたる心こそ。猶行く末も  
久しけれ。く。

ワキ詞  
「いかに是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞  
「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ  
「お事は聞き及びたる親子の者か。

シテ  
「さん候是こそ親子の者にて候へ。

ワキ  
「是は帝よりの勅使にてあるぞとよ。

シテ  
「ありがたや雲井遙かに見そなはす。我大君の詔を。

賤しき身として今承る事のありがたさよ。是こそ

親子の民にて候へ。

ワキ  
「さても此本巣の郡に。不思議なる泉出でくる由を

奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。是まで勅使を下さるゝなり。先々養老と名づけ初めし。謂を委しく申すべし。

シテ  
「さん候是に候ふは此尉が子にて候ふが。朝夕は山に入り薪を採り。我らをはごくみ候ふ処に。ある時山路の劳れにや。此水を何となく結びて飲めば。世のつねならず心も涼しく劳れも助かり。

ツレ  
「さながら仙家の薬の水も。かくやと思ひ知られ  
つゝ。やがて家路に汲み運び。父母に是をあたふ  
れば。

シテ  
「飲む心よりいつしかに。やがて老をも忘水の。  
ツレ  
「朝寐の床も起き憂からず。

二入  
「夜の寐覚もさびしかで。勇む心は真清水の。絶  
えずも老を養ふ故に。養老の滝とは申すなり。  
ワキ  
「げに／＼聞けばありがたや。さて／＼今の薬の水。  
此滝川の内にても。とりわき在所のあるやらん。

シテ  
「御覧候へ此滝壺の。少し此方の岩間より。出でくる水の泉なり。」

ワキ  
「さては是かと立ちより見れば。實に潔き山の井の。」

シテ  
「底すみわたるさざれ石の。巖となりて苔のむす。」

ワキ  
「千代に八千代のためしまでも。」

シテ  
「まのあたりなる薬の水。」

ワキ  
「誠に老を。」

シテ  
「養ふなり。」

地  
「老をだに養はゞ。まして盛の人の身に。薬とならばいつもでも。御寿命も尽きまじき。泉ぞめでたかりける。實にや玉水の。水上すめる御代ぞとて。流れの末の我らまで。豊かにすめる嬉しさよ。く。」

地クリ  
「實にや尋ねても。蓬が島の遠き世に。今のためしも生薬。水また水はよも尽きじ。」

シテサシ  
「夫れ行く川の流れは絶えずして。しかも本の水に

はあらず。

地「流れに浮ぶうたかたは。かつ消えかつ結んで。久しく澄める色とかや。

シテ「殊にげに是はためしも夏山の。

地「下行く水の薬となる。奇瑞を誰か習ひ見し。

下歌「いざや水を結ばん。いざく水を結ばん。

上歌「甕の竹葉は。く。陰や緑を重ぬらん。其外籬の荻花は。林葉の秋を汲むなりや。晋の七賢が樂し

み。劉伯倫が翫び。只此水に残れり。汲めや汲め御薬を。君の為めに捧げん。曲水に浮ぶ鸚鵡は。石にさはりて遅くとも。手にまづ取りて夜もすがら。馴れて月を汲まうよや。馴れて月を汲まうよ。山路の奥の水にては。何れの人か養ひし。

ロング地

シテ「彭祖が菊の水。したゞる露の養ひに。仙徳を受けしより。七百歳を経る事も。薬の水と聞く物を。

地「げにや薬と菊の水。其養ひの露のまに。

シテ  
「千年を経るや天地の。」

地  
「ひらけし種の草木まで。」

シテ  
「花咲き実なることわり。」

地  
「其折々と云ひながら。」

シテ  
「唯これ雨露のめぐみにて。」

地  
「養ひ得ては。花の父母たる雨露の。翁も養はれて。  
此水に馴衣の。袖ひぢて結ぶ手の。影さへ見ゆる  
山の井の。実にも薬と思ふより。老の姿も若水と。」

見るこそ嬉しかりけれ。」

ワキ詞  
「実にありがたき薬の水。急ぎ帰りて我君に。奏聞

せんこそ嬉しけれ。」

シテ詞  
「翁もかゝる御めぐみ。広き御影を尊めば。」

ワキ  
「勅使も重ねて感涙して。かゝる奇特に逢ふ事よと。」

歌  
「いひもあへねば不思議やな。く。天より光りかゝ  
やきて。滝の響きも声すみて。音楽聞え花降りぬ。  
是れ唯事と思はれず。く。」  
(中入)

「ありがたや治まる御代の習ひとて。山河草木おだやかに。五日の風や十日の。天が下照る日の光り。曇りはあらじ玉水の。薬の泉はよも尽きじ。あらありがたの奇瑞やな。

地「是とても誓ひは同じ法の水。尽せぬ御代を守るなる。

シテ「我は此山々神の宮居。

地「又は楊柳觀音菩薩。

シテ「神といひ。

地「仏といひ。

シテ「唯是れ水波の隔てにて。

地「衆生濟度の方便の声。

シテ「峰の嵐や。谷の水音滔々と。

地「拍子を揃へて音楽の響き。滝つ心を澄ましつゝ。

諸天来去の影向かな。 (神舞)

「松陰に千代をうつせる緑かな。

地「さもいさきよき山の井の水。山の井の水。山の井  
の。

シテ  
「水滔々として波悠々たり。治まる御代の君は船。

地「君は船臣は水。水よく船を浮べ浮べて。臣よく君  
をあふぐ御代とて。幾久しきも尽きせじや尽きせ  
じ。君に引かるゝ玉水の。上澄む時は下も濁らぬ  
滝津の水の。浮き立つ波の返すべくも。よき御代  
なれや。よき御代なれや。万歳の道に帰りなん。

く。  
。